

「時に、お願ひ申したい事が御座います。」

「はア、何んですか。」

「子供の行衛は解りますまいか、今の處では……」

「さア、まだその方へは取りかゝらないのですから、解りませんな。」

と、探偵長は氣の毒氣に云つた。

「奥さん、些とお伺ひしますが、坊ちゃんやお嬢さんが行衛不明になられた晩は、どんな着物を着て居られましたな。」

と、安井老探偵は、突然妙な事を聞き出した。

「はい、太郎の方は久留米緋の袷に羽織でしたし、雪子の方は矢

緋銘仙の羽織と、お納戸色の銘仙の袷を着て居りました。」

「は、あ、するとこれだな。」

と、安井老探偵は、ふくらんだ懐中から、二枚の羽織を取り出した。

「あッこれであります。」

と、狂氣の如くに喜んで、

「そして、これは何處にありました。」

「ほう、妙なものを持つてゐたね。」

と、探偵長も、不審相に安井の顔を見た。

「これは骸骨の下にありました。私が最後に出る時、フト手に觸

つたものがありましたから、何気なく見ますと、羽織が二枚です
から、探偵長に申し上げ様と思ひましたけれど、すでに先頭になつ
ておいでしたから、外へ出てから申し上げ様と思つて、その儘
懐中へ入れて来たのです。」

「ふん、なかく抜け目がないな。」

と、探偵長は感心した。

「さうしますと、子供も二人共、あの地下室へ一度は這入つたも
のと思はれますね。」

「確にさうでせうな。」

と、安井探偵は相槌を打つた。

「何うして這入つたのでせう。」

「さア、それは疑問ですな、それは何か支配人と關係のある事だ
と思ひますがね、兎に角、それは中田探偵が歸つた上で調べて見
ませう。」

と、何か考へがあるらしく探偵長は頻りに考へ込んでゐた。

「それで、子供達は無事だと思ひにならないでせうか。」
と、未亡人は心配さうに聞いた。

「それは御安心なさい、確かにこの土地の上に居られます、我々
があれ程調べても姿の見えぬと、骸骨の傍に羽織のある處から考
へても、あの抜道から外へ出られたものに、ちがひはありません

よ。」

と、確信あるらしく探偵長は、キツバリ云つた。

秘密會議

——中田探偵の行衛不明——

——しまつたツと立ち上る——

「まあ、私達にお任せなさい、必ず坊ちやんや、お嬢さんの居所も突きとめます、その上不可思議な事を、全部解決をつけますから。」

と、探偵長の頼母しい言葉に、未亡人も、吻つと安心の胸を撫で

下した。

「それでは何分よろしくお願ひします。」

と、叮嚀に頼んだ。

「承知しました、御安心なさいまし。」

と、云つて

『それから、この箱とこの寫眞は拜借して行きます。』

と、探偵長は云つた。

「え、何うぞ。」

と、未亡人は心よく承知した。

そこで探偵長はじめ他の探偵も、巡查も歸つてしまつた。

未亡人や家族のものは一間に集つて、地下室の有様を未亡人から聞いて、唯驚いてゐた。

*

*

*

*

*

*

警視廳に引き上げた探偵長はじめ、一同の探偵は、一室に集つて、この不思議な事件について、いろいろ相談をした。

「何しろ、今までの事件とは違つて、なか／＼六ヶ敷い事件ですね。」

と、安井老探偵は口を切つた。

「一體、こりや何うしたと云ふ事なんでせうな。」

と、他の一人がたづねた。

「この子供の行衛不明と云ふのが、事件の主要な事らしいね。」と、探偵長は腕を組んだ。

「その子供と云ふものが、すでにあの地下室に行つたものとしたなら、何うしてそれを知つてゐたかと云ふ事と、また一つには何うして地下室へ行けたであらうかと云ふ事が、この事件を解決つける先決問題だね。」

「こりや、庭へ遊びに出て、井戸へ這入つたんぢやありませんか。」

と、髯のある探偵が口を出した。

「まさか、井戸へ這入ると云ふ事が可笑しいぢやないかね。」

『でも、若い者同志が、夫婦になれぬと云ふのを悲観して、投身した處が、案に相違して水がなく、穴をつたつて地下室へ這入つたものぢやないでせうか。』

『は、ア北村君も面白い事を云ふね。』

と、探偵長は笑つて、

『では北村君の云ふ事からして、一つ考へて見るとしやうか。』
と、小首をかしげて、

『併しだね、僕等があゝの地下室へ這入つた時に、骸骨が仆れてゐない處を見ると、こりや井戸から這入つたものとは思はれんね。』

『ですが、這入る時仆れてもですな、中へ這入つてから、それを起したとしたら、何んなものでせうか。』

と、北村と云はれる探偵もなかく自説をまげない。

『成程、それも一理ある話したが、ぢや、何故、羽織を脱いで行つたかと云ふ事がまた疑問となるね。』

『それですか。』

と、返事に困つた北村は頭をかいて、

『羽織ですか、羽織はその……』

と、返答に窮した。

『は、は、それはまづとして、晝でも暗いあの地下室に、何う

して燈もなく這入つて、骸骨を起したりなぞするだらう、物を
がる年頃の娘と、青年とが二人してさ、第一井戸へ投身した處が
水がなければ、何も奥まで進んで行く事もあるまいと思ふ、それ
に地下室へ這入つた處が、眞暗で何が何しやら解らんぢやないか
ね。」

『それもさうですなア……』

と、北村探偵は、とう／＼さちを投げてしまつた。

『それにしてもだ、この十供さへ居れば、大抵この事件は解決つ
くと思ふが何うだね。』

『さうですな、探偵長の仰有る通りです。』

と、一同は異議がなかつた。

『すると、これは一番先に探すことゝせねばならぬ。』

と、口を切つてから、

『第二の疑問として、この箱だが……』

と、一同の前に白い汚れた箱を出して、

『これは子供と全然、関係のないものと思ふが、何うだらう。』

『さア、それはさう云ふより他にありませんな。』

と、一同は早速に應へた。

『處で、この全然関係のないと云ふ私の考へは、あの四角に薄く
筋の引いてあつた壁の中に隠されてあつた處を見れば、子供達の

全然知らう筈もなし、またこの文句によつても、證明される事だね。」

と、詳細に箱を調べた。

「この文句にある通り、血吹雪水晶でなければ、この箱は開けてはならないとの事でもあり、この箱を開ければ一命にかゝはると云ふからには、重大秘密の含まれたものにちがひない。」

「その血吹雪水晶つて、どんなものでせう。」

と、安井探偵は不審に聞いた。

「さア、これには僕も先刻から頭を悩ましてゐるのさ、血吹雪水晶とは、その名さへ聞いた事がないんだからね。」

「私達も聞いた事がありませんよ。」

と、一同も云つた。

「これは何んとかして探し出して貰はねばならない事さ。」

「さうです。」

と、一同は頷いた。

「この水晶によつて、この箱が開け得たなら、秀原家の秘密と云ふものは、立ち處に解る事と思はれるね。」

「そりやもう仰有るまでもない事と思ひます。」

と、一同も同感らしかつた。

「さて、最後の問題として、この寫真だがね、これが何うして、

あの地下室にあつたかと云ふ事と、卓也なるものゝ前身だね。』

『私もそれは考へてみました。』

と、今まで無言でゐた高本と云ふ探偵が膝をすゝめた。

『何か考へがついたかね。』

『別にこれと云ふ程でもありませんよ。』

と、高本は手を出して、

『探偵長、その寫眞をちよつと見せて下さいませんか。』

『あゝ、見給へ。』

と、渡した。

高本は寫眞の裏を出して、一同の前に出し、

『これが不思議なんですよ、これによつて、何うしても子供等が地下室へ這入つたものと、私は思はれます、尤も北村君とは考へを異にしては居りますが。』

『ほう、こゝにまた子供を持ち出す處を見ると、この寫眞は子供に縁があると云ふ譯なんだね』

と、探偵は不審の眼を見睜つた。

『さうです、子供は前から、地下室なるものを知つてゐて、這入つたものと思はれます。』

『何を目的に這入つたものと思ふね。』

『それは、この寫眞の裏に書いてあつたものを取る爲めだと思は

れます。」

『何うしてかね。』

『それは、この裏をよく御覽なさい、一枚へぎ取つたらしく、それも最近の事と見えて、まだ新しくあります、そして古くから書いてあつたものと思はれるのはごく薄く墨のシミが泌み込んで居るのが見えます。』

『なる程。』

と、探偵長は始めて氣がついて、よく見たが、處々に墨のシミらしいものがあるが、文句はとても解る程ではなかつた。

『これから考へて見ますと、筆太に書いたものと思はれます。』

『尤もだね、すると子供の地下室へ這入つたと云ふ説は八分通り有効だが、まだ疑問である處が一つ残つてゐる。』

『それは何んですか。』

と、高木は歩を進めて、問ふて見た。

『今、中田君が調べに行つてゐる支配人なるものが、もしやこの地下室の事や、この寫眞の裏に書いてあるものゝ事を知つて、忍び込んだとしたら、子供の方の説はまた無効になる譯だね。』

『それはさうですが、未亡人さへ知らぬものを、使用人の支配人が知ると云ふ事も、受け取れぬ話しですな。』

『知らんとは云はれんね。』

「すると子供だつて知らう道理がない事には、なりはしますまいか。」

「成程、これは一本参つたわい、はゝゝゝ、しかしこの秀原家の事件はまア五里夢中の有様だね。」

ど、探偵長は吻つと吐息した。

「あッ中田君と云へば氣がつかしましたが、何うしたんでせう、もう五時になります、まだ歸つて來ませんか。」

ど、安井老探偵は心配して云つた。

「さうだ、念の爲め、電話をかけて見絡へ。」

「はッ。」

ど、安井探偵は、卓上電話を引きよせて、鈴をならした。

「もし〱秀原さんですか……あッ奥さんですか、わざ〱電話口へお出ましになりましたして恐入ります、先刻は……何ういたしまして、まだ中田探偵はお伺ひしませんでせうか、えゝ……さうです、まだ……まだお伺ひしませんか、あッさうですか、なアにあまり歸りがおそいものですか、貴女の方へお伺ひしてゐるんぢやないかと存じまして……いゝえ、何ういたしまして、は、は、さうですか、何うも失禮しました。」

ど、その儘電話を切つた安井老探偵の顔は心配さうに見えた。

「まだ行きませんさうですよ、先方でも待つてゐるとのことです」

が。」

「まだ行かぬ……僕等が出かけたのは朝の十時と……それで今は午後の五時……」

と、何を思ったか、探偵長はスツクと立ち上つて、

「しまった、さア一大事だ。」

と、突然、叫んだ。

人間の水料理

——これでも喰つて死ね——

——抜いた短刀さビストル——

突然、探偵長が、

「しまったッ。」

と、云つて立ち上つたので、他の探偵等も、皆吃驚して立ち上つた。

「何うしました。」

と、安井探偵は聞いた。

「ことによると、中田君は殺られたかもしれないぞ。」

「えッ。」

と、一同はまた驚いた。

「何うしてイすか。」

「考へて見たまへ、どんな事件が起きても、必ず二三時間で歸つて来る中田君が、一日もかゝつて歸つて来ぬとは、何か大變な事が起きてゐるにちがひがないよ。」

「もしさうとしましたら、電話をかけさうなものですなア。」

と、安井老探偵は不審な顔をした。

「さア、そりや物も取り様で、何うとも思へるが、電話をかけられぬ場合がいくらもあるからね。」

「それもさうですな。」

「それに變な家へ飛び込んだ以上は、どんな事がしてないとも限らんよ、未亡人だつて電話をかけたけれど、何等の返事がなかつた。」

たと云ふぢやないか。」

「さうすると、電話の線は切斷してあるに、ちがひがありませんな。」

「さうかもしれんよ、何しろ、この儘では居られぬから、至急、行つて見やう。」

と、探偵長はじめ、居合めた探偵等は、直様、自働車に乗つて、麴町の西澤の屋敷へ乗り込んだ。

「さア、皆んな、注意して乗り込んでくれ給へよ。」

と、探偵長は充分に注意をして、潜り戸を開けやうとしたが、なかく開かない。

「おや、變だぞ。」

「こりや、屹度、中に人が居るにちがひがありませんな。」

「僕もさう思ふのだ、兎に角、塀を乗り越えて、這入つてくれ給へ。」

ど、一同を指揮して、塀を乗り越えた。

「探偵長ッ。」

ど、安井探偵は聲をかけた。

「何かね。」

ど、振り返つた。

「潜り戸なり、門なり開けて置きませうか。」

「いや、開けない方がいゝよ、萬一、賊が逃げる時に門が開いてゐると、こつちが損だから。」

「成程、さうですね。」

ど、安井はうなづいた。

「家の中へ這入る前に、二手に分れやう。」

ど、探偵長は一同を見廻して、

「安井君、君は二三人と一緒に裏手へ廻つてくれ給へ、僕は前の方からせめかゝるから。」

「よろしう御座います。」

ど、そこで、一同は二タ手に分れて、安井等は裏手の方に廻つた

探偵長は一同を庭の方にしのばせて、自分自身は大膽にも唯一人で、玄關の戸をコチ開けて、悠々としながらも、四邊に注意して、奥へくと進んで行つた。

すると、どの室もどの室にも、電燈が照し込んであつて、家の内は晝の様だつた。

『はゝア、こりや必ず支配人達は家に居るんだわい。』

と、心に思ひ乍らも、客間に一足踏み込まうとした。

その時、ビョイと疊が落ちかゝつたので、

『おやッ。』

と、思つた探偵長は、スバ番ク身を引いたので、落ち込む事をまぬ

ぬかれた。

『はゝア、落とし穴を拵へて置いたな、こりやうつかりした事は出来ない。』

と、探偵長は懷中から紙と万年筆をとり出して、

落とし穴あり、注意して這入るべし。

と、認めて、傍の柱に貼つた。

そして、尙も進むうちに、一々注意して歩いて、次の室へ這入つた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

裏手に廻つた安井探偵等は、ソツと勝手口へ這入ると、何か大聲で話し合ふ男女の聲がしたので、ハタツと、一同は聲をひそめて、

『誰か居るぞ、静かに〜。』

と、安井は注意した。

『何しろ、ごんな奴が居るんだか解らないから、うつかりすると飛んだ目に逢ふせ。』

と、互ひにしめし合せて、ソツと忍び込んだ。

『な、お傳、西澤の大將は何んで突然、外國へなんか行つたんだらうな。』

『さア、私も變に思つてゐるんだよ。』

『俺達にその譯を云はねえと云ふのが、水臭えちやねえかなア。』

『まつてくださいよ。』

と、話し合ふ處を聞いて見れば、西澤親子は確に外國へ行つたものと思はれた。

『すると、主人は居ないらしいね。』

と、安井探偵は、他の探偵をかへり見て、ソツと恚う云つた。

『何しろ、こりや聞きのがされぬ重大秘密があるにちがひがないよ。』

と、安井は他のものに云つて、尙も耳を引つたてゝ聞いた。

「私もね、大將は何處へ行くんだか、云つて行かなかつたから、解らないけれども、この地圖をね、昨夜一晩中見て居つたから、屹度、この地圖のどこかへ行くんだらうと思つて、慌て、忘れて行つたのを拾つて、先刻から見つてゐたんだよ。」

「お前にそれを見て解るかい。」

「馬鹿におしでないよ、これでも美人のお傳と云はれた女だよ、地圖が解らんで仕事が出来るかね。」

と、大した氣焰。

「それもさうだな、どれ、その地圖を見せな。」

と、地圖を出して見てゐるらしい。

「お傳、手前を大層もねえ熱を吹くと思つたら、こりや假名で書いてあらア。」

「だから、解ると云ふんだよ。」

「笑はせやがらア……」

と、尙も夢中で見てゐるらしい。

「何う考へても、この紅い筋の引いてある處へ、大將は行つたにたげえねえが、一體に何んの仕事をしに行つたんだらう。」

「付んでも、私はチョツと聞いたわけではよくは解らないが、血吹水晶とか、血吹雪水晶とか云つてゐたよ。」

「えッ血吹雪水晶ッ……」

と、長公が驚いたらしい聲、

外で忍んで聞いてゐた探偵等も、ハツとして耳をそばだてた。

お前さん、その水晶とか云ふものを知つてゐるのですか。

「いゝや、聞いた事もねえ水晶だが、一體水晶の事で外國まで行く處を見ると、こりや餘程の代物にちげえねえな。」

「さうらしいね、たかゞ水晶の一つ位と、高をくゝつてゐたが、なる程、チツトやそつとの事に、手を出さない大將が水晶一つで外國へ行く處を考へると、大したものらしいね。」

と、互ひに話しをしてゐるのを耳にした探偵等は、ますますこりや重大な事だと思つた。

秀原家と西澤支配人親子、子供二人の行衛不明に支配人の外國行き、その上血吹雪水晶、何うやら、こりや綾のある事件だなど考へたが、さて中田探偵は何うしてゐるんだらうと云ふ疑問が、互ひの胸を往來してゐた。

「處でお前さん、私達も喰ふに不自由はないとは云ひ乍ら、ノンペンだらりと遊んでも居られない事だから、何か仕事をしやうぢやないか。」

「それもいゝね、それにしても探偵の始末をつけてしまはにや、しやうがねえな。」

「もう大概にして、往生させてしまつたら、何うですえ。」

「ちげえねえ、チビ／＼責め殺すも、もう興ねえ事だから、そろそろ引道を渡す事にしやうかな。」

「それがいゝよ。」

「ちや、一つ本螺旋をひねつて、水を一度に出して水料理を仕上げるとしやうか。」

「御苦勞でも行つておいで、そして今日は早寝としやうぢやないか。」

「、、、、大人しく寝ねをするかな、あは／＼／＼。」

と、長公はフラ／＼した腰して立ち上り、

「あゝ、酔つた／＼。」

と、室を出やうとしたので、室外の探偵等は、ンツと身を引いてかくれた。

「あゝいゝ心持だ。」

と、長公は探偵が身の廻りに居やうとは、露更らしらずに、勝手の傍の水道のネヂをひねり乍ら、

「こうやれば、今に探偵だつてお駄佛だ、馬鹿の奴だ。」

と、ニヤリと笑つて、

「これ歸つて、、、、寝やうか。」

と、踵をかへす刹那、

「御用だツ……。」

ど、安井老探偵はじめ一同はバラバラと物かげからとび出して長公を取りまいた。

『やッ。』

ど、驚いた長公は、

『しまつたッ。』

ど、今は酒の酔もさめて、キツと四邊を睨んだ。

『長公、神妙にしろッ。』

ど、安井探偵は飛びかゝると、

『何をッ。』

ど、長公も強者！

サツと手返して探偵を取つて投げた。

『それ手向ひするぞ。』

ど、一同は互ひに注意して、一時にドツと四邊からせめかゝらうとした時、

『これでも喰へッ。』

ど、長公は短刀を抜いて、振り翳した。

『それッ抜いた、注意しろッ。』

ど、探偵等はピストルを出した。

探偵等の大活動

——轟然一發、また一發——

——あッ悪漢にやられた——

「サア、神妙に縛につかぬと、一發のもとに命はなくなるぞ。」

と、安井老探偵はピストルをつきつけて、長公を脅かしたけれど、長公とてさる者だ。

「何をッ。」

とは云つたが、チリ／＼と、四方から押し寄つて來たのを見て、

「こりや、とても駄目だ。」

と、腹の中で思つた彼は、何を考へたか、急に短刀を投げ出して

「旦那、待つておくんなせえ。」

と、叫んだ。

「神妙に縛につくか。」

と、安井は腹力のある聲で云ふと、

「御手数をかけやして、相済みません、もう駄目ですが、年貢の納め時ですから、大人しくお縄を頂戴いたしやせうが、何うかその飛道具だけは納めなすつておくんなせえ、恚う見えてもカラ意氣地のねえ野郎なんですから、へえ。」

と、長公は真らしく云つた。

『悪黨に似合ねえ奴だな。』

と、安井老探偵は、いさゝか安心した體で、

『お前が神妙にするにあらば、何も命を取るの何のと云ふ事はしないよ。』

と、懷中へピストルを納つたのを見た長公は、

『それぢや。お繩を頂戴いたしやせう。』

と、云ふや、一足前へ出ると同時に、しやがんだので、安井老探偵等は、はッとして身を引いた。

その隙に素早く、短刀を拾ひ上げた長公は、その儘ヒラリと傍の水道を足場に、屋根へ飛び上つた。

『それッ逃げ出すぞ。』

安井老探偵は、ピストルを出して引金を引いた。

轟然、一發！

天地を覆さんばかりの大音響。

ついで二發！ 三發！！

はてはつるべ打ちの亂射に、四邊は時ならぬ阿羅修場とはなつた。

この物音に奥に居つた探偵長は、

『そら始まつた。』

と、慌てゝかけつけた。

「何うした、何うした。」

「あッ、探偵長ですか、悪漢の逃走ですよ。」

と、安井探偵は叫び上げた。

「何ッ、悪漢の逃走。」

と、屹つとなつて、

「それッ、早く門をかためよ。」

と、命令した。

お傳はピストルの音に、

「あッ、ズキが廻つた。」

と、慌て、庭を駆け出やうとすると、

『ごつこい、さうはさせねえ。』

と、待ち伏つてゐた探偵等は、お傳を引つとらへた。

處が、この女もなか／＼の悪黨故ビクともしない。

『あれッ早く私を助けて下さい、私は悪い奴に今日までこの家に押込められて居つたのを、今手籠めに逢ふ處をピストルで脅かして逃げて来たものです、後から悪い奴が追つて来ますから。』

と、真らしく云つたのに、一同はすつかり欺かれて、

『さうか、それぢや、早く逃げろ、俺達はその筋のものだから、安心して行け。』

と、宥してくれたので、お傳は空涙を流して、

『有難う御座います、この御恩は一生忘れませんよ。』
なんかと云つてる。

『なアに禮なんか云ふには及ばぬ、早く行け、危いから。』
と、すつかり安心して放した、悪者は雀躍りして喜び、門前まで
逃げて來ると大門を開けて、

『阿呆ッ、探偵だなんぞと、大きな面をするない、お傳と云ふ女
を知らないのかい。』
と、赤い舌をペロリと出して、何處ともなく、折柄の夕暗に姿を
消してしまつた。

『サア、踏み込まうぢやないか。』

『よろしい。』

と、一同はドヤ／＼と屋内に飛び込んだが、各自の手にはピスト
ルが一挺づゝ持たれてあつた。

『おや、變なものが貼つてあるぞ。』

と、一人の探偵が云ふと、

『なる程。』

と、近よつて見ると、

落し穴あり、注意して這入るべし。

と、たしかに探偵長の筆蹟であつた。

『は、ア、すると、この室に落し穴があるんだな。』

「何うして這入つて行かう。」

と、一人が云ふと、

「急場には、こうするのだ。」

と、互ひに手をつなぎ合せて、一人が先頭に一足踏み込むと、

「ドターン。」

と、疊のあんどう返し、

「はッ。」

とした時に、他の探偵が、素早く引き止めたので、落ち込まずに助つた。

「はッア、こゝだな。」

と、互ひに注意し合つて、勝手口へ出て来た。

長公は腹ばひになつて、屋根から、屋根と傳ふて、表庭に飛び下りた。

「それ、庭へ飛び下りたぞ。」

と、安井探偵がかけつけ様とした時に、

「なあに、他の諸君が待ち伏せてゐるから、大丈夫だ、それより早く中田君の居所を『さ』にやならぬ。」

と、探偵長は部下を愛する心から、頻りと中田探偵の身の上を案じてゐた。

「あッ、それです、水道のネヂを逆に早く廻さねば、なりません

よ。』

と、安井探偵が慌て、ネヂを止めてしまつた。

『そのネヂと云ふのは何うしたんだね。』

『はい、何うも中田君は監禁されて、水責めに逢ふ處だつたらしいですよ。』

『さう聞いては、一刻もヂツとしては居られぬ、早くその處を探すとしやう。』

と、一同はまたも手分けをして、中田探偵の有所を探さうとする處へ、

『探偵長、何うしました。』

と、他の探偵等が這入つて來た。

『おや、悪漢は何うしたね。』

『へえ。悪漢と云ひますと……』

『おや、知らないのかね、悪漢は屋根から、表庭に飛び下りたから、君達が逮捕してくれたと思つたのに。』

『あツさうでしたか、私達は先に屋内に這入つてしまつたもんですから、それはとんだ事をしましたね。』

と、恐縮の體だつた。

『それは、それとして、まア仕方がない、後日探す事として、サア一同して中田君の處を探さう。』

ど、手分けした。

丁度探偵長が、書齋の室まで来ると、中は真暗だから落し穴でもありはしないかと柱につかまつて、そつと室内に這入らうとした時、何うしたハツミか、パツと電氣がついた。

『おや。』

ど、その處を見ると、落し穴と書いたボタンがあるから、注意しながら、それを押すと、中央がスツと音もなく床が開いた。

そしてその中は、水の音がするので覗いて見ると、中田探偵は半死半生の有様で、水の上に浮んでゐた。

『おッ、中田君。』

ど、思はず叫んで、

『おい、諸君、来たまえ、早く〜。』

ど、云ふ探偵長の言葉に、他を探してゐた探偵等は、ドヤ〜と這入つて来て、

『何うしました。』

ど、異口同意に聞いた。

『中田君は、床下の水の上だ。』

『えッ。』

ど、一同は覗いて見た。

『サア早く助け上げなきやならんぞ。』

「何うしたもんでせうな。」

「早く梯子を探して持つて来て下さい。」

「よろしう御座います。」

と、安井老探偵は、奥へ馳け込み、暫くして、梯子を何處からか持つて来た。

「サア中田君、これを上つて来たまへ。」

と云はれて、地獄に佛の思ひで、這々の體で這ひ上つて来て、安心した故か、バツタリ仆れた。

「おい、中田君、し、しつかりしろ。」

「はッ。」

と、氣がついた。

「何うしたのだ。」

「とに角、歸つた上でお話しいたします。」

「それもさうだ、さア歸らう。」

と、一同は中田をいたはり乍ら、門前へ出て来て見ると、自動車がない。

「あッ悪漢にやられた。」

と、探偵長は地團駄を踏んで口惜しがつた。

そして仕方なく、他の自動車を借りて、漸くに警視廳に引き上げた。

寶の山に出發

——列車中の喃喃私語——

——密計を圍す悪漢の眼——

午前七時四十五分發下の關行の列車は、今、東京驛を發車せんとしてゐる。

多くの乗客は、見送人やら、買物やらに一しきり動搖を捲起してゐたが、早發車の汽笛が、廣いプラットホームに響き渡ると、今の今迄、噪然としてゐたごよめきが、急にシーンとして仕舞つた。

此多くの乗客に紛れて、一人の青年と一人の少女が、影の如くに、三等室の一隅に慌しく乗つた。

「さあ、雪さん、最う汽車は出るよ。」

「これから、印度の一小島に、行くのかと思ふと、何んとなく、寂しいやうな氣がしますわね。」

「駄目だよ。今から、そんな氣の少つちやな事を云つてゐちや。」

「だって、私、寂しいんですもの。」

「駄目だつてばさ。だから、女は駄目だと云はれるんです。」

雪子は、そんな事を云はれると、頼り無さそうに、太郎に向つて、

「だって、妾、何んだか寂しくつて仕方がありませんわ。」

「最う僕は知らない。」

「アラ、怒つて？」

「……雪さんは次の停車場から、家へお歸んなさい。」

「太郎さんく。怒つちや厭よ、厭よ。」

「ちや、最うそんな事は、一際云ひませんか。」

「え、云はないわよ。」

太郎は別段、怒つた譯でもないが、一寸調弄つて見たのであるから、雪子は然う云はれると、直ぐと打溶けて了つた。

二人は最う、印度洋の一孤島に、早くも到着した事なぞ、空想

に描いてゐた。

この二人の少年少女が、汽車に乗り、列車が今構内を立出でんとする時、後れ走せながら、後から、コツソリと、追跡して来た怪しい男二人があつた。

「お父さん、たしかに、此下の關行に乘りましたよ。」

「ウム。して見ると、愈々血吹雪水晶の有所を突留めたな。」

「最う、こうなつたら、少しもユウくしてゐる事アありませんヨ。」

「そうだ。」

「ちや、早く。最う汽車は動いてゐますヨ。早く飛び乗らないと

後は二時間も、呆然、手を空しくして待つてゐなけりやなりませんからネ。」

「安二。ちや、早く、抜かるな。」

「大丈夫。」

それは、云はずと、知れた西澤親子の者だ。彼等は早くも、太郎と雪子が、下の關行に乗る事を、探知し、此處に追ふて來たのだ。

汽笛は轟いた。

列車は、静かに動き出して行く。

西澤親子はこれに遅れてはならじと、飛燕の如く、後尾客

にとは飛び移つた。

こんな事が、よもあらうとは、太郎雪子は夢にも想像してゐない。

「太郎さん、彼方に着いたら、本當に嬉しいわねえ。」

「僕は屹度雀躍するかも知れないヨ。」

「アラ、私もよ。」

「血吹雪水晶さへ、手に入れば、外に別段、用事のある身體ぢやないんだから、早く歸らうぢやありませんか。」

「えゝ、ほんとうに、然うね。」

「だが、ほんとうに、血吹雪水晶が、手に入つたら、どんなに嬉

しいだらう。』

『ほんとうね、今から楽しみだわ。』

『忽ち財産が、出来て仕舞ふからナ。僕は忽ち成金になつて了ふね。』

『アラ、美しいこと。』

『だつて、可いぢやないか。雪さんは、僕の奥様になるんだものそれこそ、何んでも欲しいと云ふ品物は買つて上げるよ。』

『アラ、そんな大きな聲で……皆が、此方を見てアラ／＼笑つてよ。』

太郎は、併し平氣で、

『笑つたつて構はないぢやないか。どうせ、僕の奥さんは、おんななのだもの。』

『イヤアヨ、そんな大きい聲。』

『耻かしい？雪さん、直ぐに耻しがるんだなア。』

『でも、そうよ、太郎さん、聲が大きいんですもの……』

『ぢや、最う、そんな事、云ふのは止めやう……さあ、それより此處にあるみかんでもお召んなさい。』

と、太郎は風呂敷包を開いて、雪子に、中のものを出して與へた。

『アラ、これ頂戴して可い事？』

「さあ、遠慮は抜きにしたまへ。僕皮を取つて上げやう。

「いゝわ、妾、自分で取つてヨ。」

ど、遠慮する。

「何、遠慮することなんか無いよ。さ、皮を取つた。お食んなさい。」

「まあ、濟みませんわね、ちや、頂いてヨ。」

ど、蜜柑の一片を口にして、

「マーア、お甘い事。」

「然うかい。」

「今度は、私が皮を取つて上げるわ。」

ど、雪子は優しい手つきに、甲斐々々しく、赤い皮を、剥き取つて、

「さ、如何？」

「あいら。」

ど、太郎は、それを受け取つて、ペロリと口の中に入れる。

「お甘しい？」

「オ、、、甘い。頬ツべたが、お甘しくつて、落つこつちまひそうだ。」

「そんな？」

「お甘しいにも、なんにも、雪さんが剥いて下すつたんだから。」

『アラ。』

『ハ、、、。』

『ホ、、、。』

二人は無邪氣に笑つて、蜜柑を食べ合ふた。身の周囲を襲ふてゐる、恐るべき西澤健一、安二の同列車に、乗つて居る事なぞ、知る由もなく。

列車は幾驛かを通過した。

此方は、西澤親子である。安二は父に向つて、

『最う、こうなれば、此方のものでさ、これからは仕事の仕時ですよ。』

『そうだ。これから先が、肝要だて。何しろ、まかり違ふたら、命懸けの仕事だ。』

『だけど、まさか、我々が此同じ列車に乗り合せてゐる事なぞ、知つては居りやしないでしょうねえ。』

『大丈夫だ。そいつは大丈夫だ。まあ、そんな事は心配しないが可い。これからの仕事の上にも影響するで、そう頭ばかり痛め、取越苦勞する事はないヨ。幸ひ、向方の知らない處が、此方のつけ目だもの。』

『然うです。だが、早く向方へ行き度いですねえ。』

『そうお前のやうに、氣ばかり焦らせたつて仕方がない。』

と、健一は内懷中を叩いて見せて、

「萬事、此胸の遺書にあるヨ。」

「そうです。僕もそれで安心しました。」

健一は其時葉巻の入物を出して、

「安二、まあ、ゆつくり、煙草でも吸ふて、將來のことを、考へるさ。」

「一本頂戴します。」

安二はシガーに火を點じ、スバくどやつてゐる。

「併し、考へて見りや、大した事になつたものさ。」

「全くですね。」

と、安二は煙を吹きつゝ、相槌を打つ。

「彼の子供達よりか早く行くに越した事はないが、タカの知れた彼んな木ツ葉子供、向方に到着さへして了へば、又何うにでもなるて。」

「そんなに心配する事はありませんよ。」

「子供は殺つゝけちまふんだな。」

「併し此處は早計しては大變な處です、あの子供達が萬一、幸ひに地圖のやうなものを持つてりや、此方のものでさ。」

と、悪さうな笑をして、

「私アたしかに持つてゐると思ひますヨ。」

「俺もそうは思つてゐるが……」

「もし持つてゐるとしたら、厭應なしに此方に捲き上げちまふんですね。」

「そうするより仕方アあるまい。」

悪漢の相談は尙も何時果てるとも見えず續いてゐる。

「だから向方に着いたら、一つ身體を取調べて呉れやうぢやありませんか。」

「やつて見る。併し大丈夫だらうな。」

「あんな子供、何、ビク／＼する事アありませんや。」

「それ聞いて俺も安心したが……」

「手間暇無しにグヅ／＼吐かしかつたら疊んで了はあ。」

「抜かるな。」

「え、最、朝飯前でさあ。」

血吹雪水晶を慕ふて、善と悪、然も一つ列車の前と後に同乗して、向ふ此處二晝夜。

「下の關、下の關。」

と云ふ驛員の呼聲に、

「ア、太郎さん、下の關よ。」

「ウン、下の關だ。」

二人は早くも降る支度をした。

二人が下の關の停車場を出て。港の方に向ふ途中、恰も影の如く、これを尾行した男二人。

云はずもがな。

彼の悪味極りなき、西澤親子であつた。

「見失ふな。見失つたらタマヤだぞ。」

ど、健一は安二に注意した。

「タマヤにされてたまるものかい。大丈夫、何處迄だつて追駈けて呉れます。」

ど、執拗にも一層注意して追ふて行く。

船中の秘語

——何？怪しい男？——

——やア運の盡きか——

太郎と雪子は、後から西澤親子が尾行して來ると云ふ事は、夢にも知らない。せつせと、港の汽船發着所に來た。

恰度、其處を通り合せた船員の一名に、

「印度カルカッタ行は未だ出ませんか。」

「カルカッタは最う、どつくに出帆しました。」

「えい？」

と、吃驚して、

「最う……あの……最う出帆して丁ひましたが。ア、遅かつた、遅かつた。」

船員は不思議さうに、

「貴方方、お二人は印度、カルカッタにこれから、お出かけですか？」

「え、僕は非常に急いで、行かねばならぬ者ですが、最う出て了つては、残念ですが仕方ありません。」

「それはく。」

と、氣の毒さうに見下ろして、

「ですが、此次の出帆では不可ませんか。」

「この次は何時です？」

「この次ですか。」

「え。」

「この次は最う、二時間ばかり待たなければ、駄目です。」

「然うですか……」

と、失望したが、

「ではそれ迄待つ事にしませう。」

「太郎さん、二時間待つのか？」

と、側から雪子は心配氣に訊いた。

「仕方ありません、待つとしませう。」

二人は暫時、側の待合室に入つて憩ふことになつた。

絶へず二人の後から、追ふてゐた西澤親子は、

「オヤ／＼。船が出ないと見えますね。」

「しまつた。船が出ないとすると、待つんだナ、此奴は弱つた。」

「だが、却つて此方の勿怪の幸ひとなるかも知れませんよ。」

と、安二は早くも振目の無い目に、休憩所の方を睨んで、

「ですから、此方も知らん振をして、待ち合せやうぢやありませんか。」

「そうだな。」

西澤親子は、その間も二人の姿を見失はぬやうに絶へず目を注
けながら、近處で煙草などを買ふて、吹かし出した。

こうしてゐる内に、早くも二時間は過ぎた。

「さあ、船が出ますヨ。」

と云ふ聲に、二人は直ぐに立上つた。

「さあ、雪さん。行きませう。」

「え。」

「此船に遅れて了つたら、それこそ大變です。」

「ほんとうに然うですわ。」

なぞと話しながら、二人はアタフタと慌しく、印度のカルカッタ行の汽船に分乗した。

と、同時に、西澤親子の姿も、吸ひ込まれるやうに、船に乗つた。

『さア、これからがお父さん、仕事ですよ。』

『然うだ、充分力を籠めてかゝるんだナ。』

太郎と雪子は未だこれを知らない。

最う船にさへ乗つて了へば、只目的の地に到着するのを、待つより外にないのであつた。

『まア、可い景色だこと。』

と、雪子は、水や空なる、海の彼方を打噴めつゝ、恍惚としてゐる。

船は早、出てゐた。

此方は悪辣なる西澤親子である。

『事に依つたら、何んぢやありませんか、一思ひに、途中、海の底に葬つて了はふぢやないですか。』

『それも一策だが、仕損じてしまつたらコトだで、よつぽご用心に用心をしなければ不可。』

こうした事なぞ、それからそれと、相談しつゝある内に、海は早、夜の帳に閉ざされた。

船内には、一せいに電燈がバツと點つた。
食後の事だ。

太郎と話し合つてゐた、雪子は押へてゐた頭を、もたげて、
『私、頭痛がしますから、これから、甲板に行つて、少し冷やして來ますわ。』

『ア、そりや不可ないね、ちや行つておいでなさい。』
許が出たのだから、雪子は喜んで静かに上甲板に上つた。

空には淡い朦の月が流れてゐた。見下す水面はどんよりと暗く
渦巻いてゐる。

上甲板は薄暗い。

何處ともなく忍び寄る海の香と、快い風に、暫らくは恍惚としてゐた。

此時、甲板の後尾の階下階段から、上つて來た一人の怪しい男があつた。

何氣なく、雪子は、ふツと其怪しき男の姿を見たが、直ぐに恐るべきものを見たやうに、太郎の室に駈込んで來た。

西澤の方も吃驚して、疾走し去つた。

慌しく、駈込んで來た雪子の只ならぬ、様子に、吃驚して太郎が、

『何うしたんです、何うしたんです。』

「大變です。」

と、雪子は半ば失神したやうに、

「私が今、甲板に上ると、後から……真黒くつて解りませんが……怪しい男がく。」

「何、怪しい男が……」

「え、そして私が振返つたら、大急ぎで逃げて、行つたんですの。」

「はて。」

と、太郎は首を領垂れて、暫時、沈思黙考した。

「あ、分つた、分つた。」

「何んです？」

「屹度、西澤親子ですよ。」

「え!？」

と、ばかり、雪子は色を失つた。

「西澤さんが、どうして私達を追駈けて来るんでせう。」

「矢張、血吹雪水晶を、僕達が探險に、危険を冒して印度まで行く事を知つたんだなア……」

と、太郎は尙も腕組をした儘で唸つた。

「あの、では、血吹雪水晶の有る地圖の所も、知つたんでせうか？」

「叱、叱、小さい聲で、それを立聞きされたら、それこそ、運の盡きです。」

『そうでしたね。』

ど、今更乍ら雪子は思はず我々の使命の重大なる事を知つて、ギクンとした。

一方、西澤親子の方では、

「ラン、今、甲板に立つてゐたのは雪子だナ。」

ど、健一は安二に云つた。

「へえ、雪子が居ましたか、恰度こんな朧月の晩、海の中へ叩ッ込んでしまはふぢやありませんか。」

ど、氣の早い事を、安二は云つた。

「まあ待て、そんな性急な事を云つて、九俣の功を一簣に缺いちまつちや、それこそタマヤだ、まあく待てく。」

ど、健一はそれを制して、

「事、此處に至つて例の江戸ッ子氣性を出して、失敗しちまつちや駄目だよ。」

『然うですね。』

ど、安二も考へ、

「ぢや、まあ、向方に着いてからでも、怎うにでもなりますからね。」

「まア、だから最う少し待て。」

「え。」

話はそれ限杜絶へた。

*

*

*

*

*

*

翌朝、この四人は、思はずも、食卓についた折、顔を見合せたお互ひに、驚いたやうな、顔色をしたが、強いて、平氣を装ふてゐた。

「西澤さん、家の方は片がつきましたか、未だゴタゴタしてゐるんでせう。」

「え、やうやく後片つけは済みました。最う御心配なさる事はありませんよ。家の方の事は一切、私が整理をして参りましたから。」

表面、殊更に平氣を装ふてゐるが、西澤の心中、嵐が吹いてゐる。

「それはそうと、太郎さん、貴方はお家で御心配をなすつて被來るのに何處へお出かけなんです？」

「僕？」

「え、家では随分御按じになつてらつしやるでしやう。」

「僕は印度のカルカッタ迄行くんですが。」

「何んの御用で。」

「何んの用つて？ そんなことは、どうでも、可いちやないですか。」

ど、太郎は、面倒臭さそうに顔を蹙めて、

「それよりか、貴方は？」

「私ですか。」

「え。」

「私は、これから、御店の用事や、私の商業上の事で、英國迄行く途中なんです。」

「ほう。」

ど、太郎は故意と驚いたやうに顔を睜めて、

「英國迄？ そりや大變ですね。」

「ですから、印度のカルカタ迄は、御一處に参る事は出来ませぬね。」

なぞ、健一は口から出放題を云つた。

「英國迄、参る途中ですなら、どうか、僕等も何分保護を御願ひします。」

ど、純心な太郎は、何事か知らぬ氣に然う云つた。

健一は横手を打つてゐる。

保護?? 保護??

此位、危険な保護が、何處にあらう。

敵 同 士

——突然現はれたボート——
——孤島に戦ふ二組の人——

斯くて、印度カルカッタに到着した汽船の中から、吐き出されるやうに、陸上に降りた多くの船客の中には、少年太郎、少女雪子も有つた。

太郎も、雪子も、今更のやうに、奇異なる、風俗や家屋に仰天したやうに、

「まあ、こんな處とは、私、一寸も想像しなかつたわ。」
「僕もさ、ほんとうに吃驚したね。」

こんな事を語り合ひながら上陸したが、太郎は家を出る時、金を澤山に所持して來たので、カルカッタの汽船問屋に、その足で直ぐと赴くと、

「僕は、こういふ次第で、タクヤ島に、行かうと思ふて、居りますが、短艇を一艘、僕に、譲つて下さる譯には、行きませんかしら。」

と、話をするに、汽船問屋の主人は、別段に怪しむべくもなく、心よく、

「どうですか、よろしうございますとも、此方へ被來しつて下さい。」

と、倉庫の方に二人を案内して、

「幸ひ此處に一艘ボートが空いて居りますから、これで可かつたらお使いなさい。」

と、云つて、空いてゐたボートを指した。

「ア、これですか。何うも有難う。それでは、これを、譲つて下さい。」

「承知しました。では、早速、人足共に云ひつけて、海岸へ浮ばせませう。」

「では、これは幾ら位でお買ひする事が出来ませうか？」

「そうですね、此間修繕したばかりで、未だ大分、役に立つでしようから、五十圓位なら、お求に應じて、よろしう、ございませう。」

「五十圓。では此處に幸ひ五十圓、持合せてゐますから。」

と、太郎は懷中より五十圓紙幣を出して、

「何うか、受取つて下さい。」

主人は五十圓を手に入れると、

「たしかに、頂戴いたしました。では、只今、受取を差上げますから。」

「いゝえ、受取なんか、よござんす。」

太郎は、勇みに勇んで、一艘のボートが、懸て、海岸の一隅に浮び出すと、これに飛移つた。

「さあ、雪さん。これからタクヤ島に出懸けて行つて、血吹雪水晶を探し出すんです。」

「まあ、嬉しいわね。」

雪子も今は遂に決心してゐるから、今は若い胸の血が、この快舉に燃えさかつてゐる。

* * * * *

懸てボートは太郎の手によつて、沖合に漕ぎ出された。

折柄、空は少し險惡に、曇りかゝつてゐたが、今はそんな事に頓着をしてゐる場合が場合でなかつたので、太郎は、力の續く限り、手に汗を握らせて、ごんぐと、目ざす、タクヤ島にと向つた。

が、こうした、太郎の勇しい行動の蔭にも絶へずかの惡辣極りなき西澤親子が、隙こそあらば太郎を抜いて、先に島に漕ぎ着き、彼の有名な血吹雪水晶を、奪ひ呉れんものと、追ふてゐるのであつた。

さりとは、露だに身に知る由もなく、太郎と雪子の同乗せるボ

トは、それから一晝夜を漕ぎ続けた。あくる朝の七時頃、渺茫たる海の真中に當つて、それと覺しき一孤島を發見することを得たのであつた。

「雪さん、く。御覽なさい。あの島は、たしかにタクヤ島ですよ。」

と、太郎が一早くも叫んだ時。

「あら、然う。」

と、雪子は思はず手を打つて、赤坊のやうに大騒ぎをした。

船は一層に力を籠めて漕ぎ出された。

空は何時しかに晴れ渡つて、曉の風は快く、二人の顔や胸に、

喜びと爽さを與へて、行手の次第に近づくに従つて、一層に二人の青春の血を湧せた。

斯くて船はその一孤島の一端にと、やうやくの思ひで到着することが出来た。

「さあ、雪さん、着きましたよ、降りて下さい。」

と、嬉しいやうな聲で、太郎が叫んだ時、雪子も共々嬉しさうにして、

「あの太郎さん、危いから手を一寸、取つて頂戴な。」

「よろしい。よし來た。さ、僕の肩に掴つて、然うおつかながらなくつたつて、よござんすよ。さ、大丈夫。」

やうやく、太郎の手に絶つて、雪子は、濡れた岩の上に足を乗せ得た。

『どうも、有難う。』

二人は愈々、タクヤ島の島内へと進んだ。

此方は西澤親子である。

二人を見失つては大變と云ふので、西澤親子は、祕密裡の内に何處から持つて来たか解らないが、一艘のボートに乗つて、此處に何時の間にかやつて来た。

『さあ、二人は島の内に來て了つてゐます。仕事をするのは、今夜中ですよ。』

『然うだ、兎に角、太郎の奴に、事を見とられては一大事だからナ。充分、事を知られないやうに、やつて呉れなけりや可けないぞ。』

『大丈夫です。』

先に太郎、雪子が、島の一角に到着したのに、何うして會はないかと云ふに、殆んど同時に、海岸を出は出たもの、西澤親子は同じ島でも、太郎は前方の一角、彼等はそれと、反對の後方の一角に到着したから會はないのだ。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

愈々、その夜に至つた。

何様、生れて始めてこんな處へ来た事とて、容易に島内の案内は、解らなかつたが、血吹雪水晶を厭が應でも探ね出だし、歸國せねば止まぬの一大努力は、そんな事柄をも排して了ふ偉大な力を持つてゐた。

「雪さん。では、僕はこれから、血吹雪水晶の有所を探ね出すんですから、寂しいでせうが、此處に待つて居つて下さい。」

「アラ、厭よ、妾、寂しくつて到底も待つてなんぞ居られやアしないわ。」

「又、そんな氣の少つちやい事を云ふのかなア。ぢや、まア、可

いや明日にしやう。」

「さうなさいね。」

太郎も雪子を獨り残して、此處を放れて獨り血吹雪水晶の有所を、探見に行くのは、眞實本意でなかつたのである。

「ぢや、ゆつくり、これから、話しでもしながら、寢る事にしませう。」

で、太郎は早速木蔭の下に、持つて來た毛布なぞ廣げた。

二人は、色々の事を話し合ひ乍ら、其夜は其處に、夢路を辿る事になつた。

恰度、其頃、西澤親子は、持つて來たカンテラに火を點じ、こ

れから探險に行く支度をしてゐた。

「最う、太郎も雪子も、休んで了つたらう。」

と、健一が云へば、

「え、最う船の疲や晝の疲れで、休んで了つたでしようよ。」

「何しろ、事ここに至つたんだから、充分手ぬかりはないが、氣を付けて、お前もかゝつて呉れ。」

「え、ですから、私の考では人知れず、殺つて了つた方が可いだらうと思ふんです。」

「お前は、何かと云ふと、それだから困るんだ。」

「困る」と云ふて居つたら、何時になつたら、二人を殺つちま

ふんです?」

「……ぢや、殺つちまふかな。」

「一思ひに私にお任せなさい。」

「よし、それぢや、お前に任せやう。」

と、健一は、安二の手を取つた。

*

*

*

*

*

*

命を受けたる安二は、直様仕度に取りかゝつた。

「では、私は彼奴等二人を殺つて来て了ひますから、貴方は血吹雪水晶を、探しに行つて下さい。」

『よし。』

相談は決まつた。

安二は二人を葬つて了ふべく、そつと、幸ひの闇に乗じて、姿を消した。

二人は全く、そうした鬼が、自分達を絶へず忍び伺ふてゐると云ふ事は知らないから、グー〜と、快い高聲さへも、搔いて寢てゐる。

* * * * *

忽ち、二人の中の一人の悲鳴が闇の夜に起つた。

果して安二の爲に殺られて了つただらうか。

『さあ、ジタバタすると、容謝はせんぞ、聲を立てたつて、こんな無人島のやうな島だ。』

『……苦……苦……苦しい。貴様はく誰だ？』

と、叫んで立上つたのは太郎だ。

『何？ 俺の名だ。』

『名を名乗れ。』

と、太郎は金切聲で再び叫んだ。

『俺は、西澤安二と云ふ者だ。』

『さては、西澤親子の者か、こんな處へ、何時の間にか、やつて

来たんだな。」

「知れた事だい。」

「畜生ッ奴、よし、殺せるものなら、殺して見ろ。貴様なぞに、殺られて了ふやうな太郎ぢやないんだ。」

「何を吐かしやがる。」

「さあ来い。」

忽ち、西澤安二と太郎とは格闘を續けた。

雪子は忽ち目覺めた。

「アッ、太郎さんが。」

「雪さん、安二は僕を殺しに来たんです、反對に殺つゝけて了ひ

ますから、外方の方に、放れてゐて下さい。」

雪子は、驚き乍らも、遠くの方に去つて見物した。

さて、太郎が果して、安二に打勝つや否や？

意外な怪物

——暗中に光る血吹雪水晶——

——蠻人に追はれて海岸へ——

さて、太郎雪子對西澤親子の、血吹雪水晶探索の前に、ずつと三十年前に逆のぼつて、秀原卓也が印度洋中の一孤島に居つた當時を少し話して置かう。

卓也は船の沈没と同時に、板子一枚で、荒捲く波を物ともせず
に、漂着したのが、無名の孤島であつた。

漸くの思ひで、命は助つたものゝ、半日……漂ふてゐた事故
もう立つ事も何うする事も出来なかつたのである。

けれど人間の必死の覺悟は恐いもので、バナ、なぞを喰つて
漸く生きた心地になつたのであつた。

その夜、眞暗な空から、キラ／＼と光つたものが、足もと
に落ちたので、卓也は吃驚したのである。

それを拾ひ上げて見ると、血次雪の様な光りを發して、實に何
とも云へぬ美事な水晶だつた。

卓也は非常に驚いたが、また大層喜んだ。

『あッ、これは美事なものだ、大層なものだ、おゝこの光り。』
と、暫くは見惚れてゐた。

『これは世にも珍しい、またとないものに違ひない。』
と、飛び上る程、喜んだ卓也は、

『不幸が却つて幸福になつたのだ。俺の身に幸多い日の來る前兆
なのだ。』

と、嬉し涙を流して喜んだ。

その翌日からは、早く歸りたいと云ふ心地のみで、毎日毎夜、
沖を眺めては、船の煙を案じて居つた。

三度の食事は木の實を喰べ、寝るには木の下蔭に、枯草を敷いて、戀しき故郷の暖かい夢を結んで居つた。

ある日の事、卓也はこの島の奥深くへ、進んで行つた時に、はからずも、路上に金光りするものを發見した。

それはダイヤモンドの野生のものだつた。

卓也は、幸福のみ多く續いてゐたが、日本の國へはいつ歸れるのか解らなかつた。

それのみ苦にしてゐた卓也が、一夜血吹雪水晶を取り出して、飽かず眺めてゐると、ピカツ／＼と輝くうるはしさ。

と、突然、變な風をした男が現れた。

『やい、やい。』

と、大音響で云つたので卓也はビックリした。

『その光るものは、この島の神様なんだから、山のほこらに納めて來るのだ。』

と、云つた。

『馬鹿云へ、そんな事があるものか、こりや普通の水晶ではないか。』

と、卓也は蠻人の胸をついたので、蠻人は怒つてしまつて、

『己れ、怪しき奴。』

と、ばかりに、大刀を抜いて切つてかゝつた。

『汝れッ。』

ど、卓也も必死になつて、戦ふうちに。

『あッ。』

ど、云つて、蠻人は電氣に打たれた様に、ブル／＼顫えはじめた
その時、再びピカツ／＼と輝くと、

『うーむ。』

ど、云つた切りで仆れてしまつた。

『おやッ。』

ど、卓也も吃驚してしまつた。

『何うしたんだらう。』

ど、蠻人の身體に觸つて見ると、硬ばつて仆れて、息が絶えてしまつたのである。

『さア、大變だ。この水晶は人を殺す威力を持つてゐるんだ。』

ど、今更らの様に見なほして見たが、

『併し何うして、自分ばかり死なぬのであらうか。』

ど、不審に思つたが、

『は、ア、こりや、悪意を持つてゐるものにのみ、害を及ぼすのだな。』

ど、はじめて氣がついた時、

『あ、得難い水晶だ。これは本國へ持つて歸らねばならぬ。こ

れさへあれば、盗人の除けにもなるし、また世界一の寶物所有者ともなれる。』

と、喜び勇んでゐたのであつた。

その翌日、死んだ蠻人が、生き返つたのか、何うかは知らぬがその姿形さへ見えなかつた。

『おやアツ、こりや變だぞ。』

と、ますます卓也は不審に思つたのである。

その夜、何處からともなく、

『ワア……』

と、云ふ関の聲。

『はて。』

と、卓也は不審に思つて、いつも寢床にしてゐる椰子の木の下から、這ひ上つて見た。

すると、先方から明松を持つて、多數の蠻人が、手に手に、弓矢を持つて押し寄せて來たのであつた。

『あゝ、困つたものだ、こりや捕えられては、命がない。』

と、彼は一目散に、何處と云ふ目的もなく、海岸をヒタ走りに走つた。

だん／＼と遠のくに從つて、蠻人等の聲も聞こえなくなつたし自分もへト／＼になつて、砂地へ何かにつまづいて、パツタリ休

れると同時に、吻つと一息して、その儘起き上る事も出来なかつた。

無論もう身動きするのさへ出来ない程になつてゐたので、しいて起き上らうともしなかつたが、いつとはなしに、ウトくと眠つてしまつた。

翌朝、眼を醒して見ると、後に誰か忍びよる様だつたから、ハツとして立ち上ると、先方も驚いたらしく立ちどまつた。

よく見ると、それは蠻人の、年老つた女だつたので卓也は吻つとして、

『なアに、女なら負けないぞ、しかも年老つてゐる様だ、一人と

一人だ、負けてなるものか。』

と、彼はそれでも充分の注意はしてゐた。

處が、案外にも、その女は靜かに近よつて、

『もしや、貴方は昨夜、多數の人に追はれて、逃げた方でせう。』

と、問ふので、卓也も隠したとて、知れる事と思つたので、

『さうだ、俺は逃げて來たものだ、それが何うした。』

と、噛みつく様に云つたが、女はニヤ／＼と薄氣味悪く笑ひ乍ら

『さぞ、お困りの事でしたでせう。』

と、優しい言葉に、卓也も意外に思つた。

そして、少しは心も折れたので、少し物柔かく、

「實に困つたよ。」

と、當惑らしく云つた。

「お察し申します、何處の國の方かは存じませぬが、見知らぬ、この島へお着きになつて、そして昨夜の様な事にお逢ひになればそれは誰でも切ない事で御座いますよ。」

「こいつ、なかく話せる。」

と、思つた卓也は、すつかり安心した。

「一體この島は何んど云ふ島だね。」

「さア、島に名がついてゐるか、何うか存じませんよ。」
と、平氣なものであつた。

『すると、この島は無名島かな。』

と、思つた卓也は、

「俺が將來の生きた歴史の二頁に加へる爲め、この島へ來た事のあるを紀念する爲め、卓也(タクヤ)島と名づけやう。」
と、心に思つて、

「この島は俺が名をつけてやらう。」

「へえ、何んどつけて下さいますので。」

「タクヤ島と云ふんだ。」

「へえ、そりや、ごここから考へてつけたんですえ。」

「俺の名をつけたんだ。」

「有難う御座います。」

「處でお前に聞いたら解るだらうと思ふが、昨夜死んだ人は何うした。」

「へえ、誰か死にましたかい。」

「お前は知らんのか。」

「へえ、少しも知りません。」

「實は昨夜、突然男が来て、この水晶を返せと云ふんだ。」
と、出して見せると、

「ウへ……」

と、その女は平身低頭してしまつた。

「おい、どうして、お前はそんな事をするのだ。」と聞く。

「それは神様です。」

「何の神様だ。」

「この島の神様です。」

「ほう、これが、この島の神様なのか。」

「それはくなく、大したものですよ、それを取られたとて、島中のものが騒いだもので御座います、それを返さねば、必ず貴方は殺されてしまひますから、お返しなさい。」

「そんな馬鹿な事があるものか。」

「ふん。」

「それがお厭なら、何處かへおかくしにならぬと、屹度、島中總
が、りで、貴方を探しますよ。」

「隠せば何うしてよいんだ。」

「つまり、神様が天國へお歸りになつたと思ひますよ。」

「は、ア無智な人間は困つたものだ。」

とは云つたものゝ、卓也の考へるには、無事に一先本國へ歸つて
改めて、また出直して來やう、そして、金鑛脈や、またダイヤ
モンドを探さうと、そこで、この女の云ふ通りに信用して、丁度
傍に聳えてある三角の形をした山の、椰子の木から少しはなれた
穴の中に這入り、二つ目の穴を右に折れて、その奥の上を掘つて

中へ血吹雪水晶を埋めて、上に大きな石を目じるしに置いて、

『さア、もうこれでよい。』

と、安心して、沖合を通つた外國船に助けられて、無事に東京へ
歸つて來たのであつた。

その後で、その女の案内で蠻人等が、その血吹雪水晶を掘り出
して、例の通り、神様として、畏ひ奉つてゐる事は夢にもしらな
いのである。

それから、死ぬまで一日として、血吹雪水晶を取りに來やうと
は思つてはゐたが、遂に果たせず、彼は太郎と雪子に遺言して
死んでしまつたのである。

著者曰く「本號は頁數に限りがありますから、遺憾ながら次は又
又「血の光」と題し發行致しましたから續いて御愛讀を願ひ
ます。」

探偵 奇談 血吹雪水晶 (中卷) 終

探偵 奇談 血吹雪水晶 (下卷)

暗中の終團

——地圖を奪はれては——
——サツミ輝く血の光——

太郎と雪子は、生れてはじめて来て見た、このすべてが變つた
しかも孤島に來た時は、心細いやら悲しいやらの心持ちに支配さ

れてゐた。

わけても、雪子は女の身の年若いだけに、一しほやるせない感じはしたものの、戀しい男の傍に居る事でもあり、また物珍らしい風上に晝のうちは、驚異の眼を睜つて見てはゐたが、さて夜となれば、四邊はおろか空さへごんよりとして、眞暗な天地に、物凄波の岩を嘯む響に、身顛ひして、唯、太郎の傍にすり寄つて居るばかりだつた。

『太郎さん、何んだか恐ろしい處だわねえ。』
と、四邊を見廻して、キヨロ／＼してゐた。

『夜は何處だつて、物静な處は凄く思はれるものさ。』

『ですけれど、あまりに物静……ごますわ。』

『それはさうだ、けれどもそんなに恐がるなら、何故一緒に來ると云つたの。』

『だつて、私、太郎さんが被來ると仰有るから、ついて來たんですわ。』

『でも、僕は物見遊山に來たんぢやありませんよ、亡き伯父さんの遺言を果たす爲めに來たんぢやありませんか、そんなに心弱いのなら、貴女一人でお歸りなさいな。』

『厭よ、厭よ、太郎さんとでなけりや、何處へも、行きやしないわ。』

「僕の東京へ歸るのはいつだか、解りませんよ。」

「でも、いつ頃、歸れるか位は、おおよそ解りさうなものぢやなくつて？」

「さア、それが、百年後だか、千年の後だか、僕にもわからないね。」

「あら、そんなにまで、此の島に被在るの。」

「いや、しかし、時と場合によれば、明日にも歸るかもしれませんよ。」

「あら、揶揄つちや厭だわ。」

「本當さ、血吹雪水晶が、明日でも手に這入れば、一日だつてこ

んな處に居るもんですか。」

「それはさうですわね、でも、明日は歸れることになるだらうと思ひますわ。」

「何うして。」

「でも地圖があるから、それによつて、明日は血吹雪水晶を手に入られるでせう。」

「さうは云ふものゝ、地圖の傍に書いてある、三角山の云々——とあるが、その三角山といふのはごこの山か解らないぢやありませんか。」

「困つたわねえ。」

『それだから、百年やら千年やら、また明日だやら、わからない
と云ふんですよ。』

『何故、伯父さんは、もつと叮嚀ていねいに書いて置いて下さらなかつた
んでせう。』

『そんな無理なことを云つたつてそりやあ駄目だめですよ、伯父さん
だつて、これには何か考へがあつてなすつた事だと思ひますから
ね。』

『私、早く歸りたいわ。』

と、シクシク泣き出した。

『本當ほんたうに雪さんにも弱よひつてしまふナア。』

と、吐息といきして、

『だから、來ない方がよいと云つたのに。』
と、暫く考へ込んでゐたが、

『何うせ、今日乗つて來た船が、明日歸るんだから、雪さんは一
人でお歸りなさいよ。』

『あら、厭いやよ〜。』

と、尙も泣く、

『ぢや、私の歸るまで一緒に被在いらいいよ。』

『え、死んでもお傍そばを放れませんわ。』

『さア、バンでも喰べて、今夜は寢やすみませう。』

『え、さうしませうね。』

と、二人は睦しくバスケットから、パンを出して一つのものを二つに割つて、喰べ合ふた。

假令、千里の距離を放れてゐても、好いた同志が、水入らずで氣儘氣隨で、勝手な事を云ひ合つて、楽しく語り乍ら、物を喰べるとは、サテ著者自身も、太郎や雪子がウラやましくて……は、は、。

その夜、二人が、恐ろしい、悲しい、淋しい、佗しい、情ない何とも云へぬ思ひで、この絶海の孤島たるタクヤ島に、夜を明す事とした。

「伯父さんだつて、この島で寝られたんですよ。」

「さうだわねえ、伯父さんは、私達と違つて、ほんとに唯一人で淋しかなかつたでせうか。」

「そりや僕の様にも何とも云へぬ恐ろしい心持ちだつたでせうよ、けれど、伯父さんは僕等とちがつて、勇氣に富んだ方でしたから、さほごにも思はれなかつたかもしれませんよ。」

「伯父さんのおゐりになつた處かと思ふと、恐ろしいながらも何となくなつかしい心地がしますわねえ。」

「さうですね。」
と、寢返をうつて、

「無、僕どちがつて、お金も何もなかつたんだから、無お困りだつたと思はれますね。」

「それを思ふと、私達はほんとに幸福ですわ、まるで遊山に來た様なものね。」

「それでも、血吹雪水晶探索の大責任がありますから、そんな呑氣な事を云つて居られませんよ。」

「まつたくだわ、だから、明日は一生懸命になつて、早く探し出して、そして東京へ歸りませうね。」

と、物語り乍ら、二人はうとくと眠りに落ちたが、旅の疲れがでてか、年若な故か、恐しいも凄しいも、心淋しいも悲しいと云ふ

のも、わずかの間で、はてはスヤ／＼と夢路を辿つてゐた。

この時！ この時である！

眞暗なやみの中から、ニューと現はれた一人の男があつた。

暫くは二人の様子をうかつてゐた様だつたが、

「は、ア、よく眠つてゐるわい。」

と、ニヤリと笑つて、

「どれ、仕事にかゝらうか。」

と、最初、雪子に何かかゝせた様だつたが、何うしたはずみか太郎の足を踏んだので、はつとして眼を醒した太郎は、これを見るなり、ガバツと跳ね起きて、

「曲者ッ。」

と、怪物に獅噛みついた。

「何をッ。」

と、怪物も必死になつて、争つたが、何しろ太郎はまだ十九の青年であるから、つひに負けて、

「やつ。」

と、投げつけられた。

その拍子に、何處かへ脾腹を打つたと見えて、

「あッ。」

と、云つたさき、太郎は仆れて息が絶えた。

「態を見る。」

と、凄く笑つた怪物は、

「もう邪魔者はないから、安心して仕事が出来るわい。」

と、悠々として、バスケットを探したが、

「おやッ持つてゐないのか。」

と、こんどは太郎の身體中を探したけれど、怪物はやつぱり、

「ないぞ、おやく。」

と、残念さうに云つた。

「こりや、雪子の方が持つてゐるかも知れんぞ。」
と、雪子の身體を探しはじめた。

「あつた。あつた。」

ど、怪物は雀躍りして、何かの片れはじと思はれる様な、紙を取り出した。

「これさへありや大丈夫だ。」

ど、怪物はその儘姿を暗の中に消してしまつた。

この男は云ふまでもない西澤安二であつた。

暫くすると、何か話し乍ら大焚を持つて、大勢の土人がやつて来た。

「おや、女が仆れてゐるぞ。」

ど、一人が云ふと、一人はよく見て、

「さうだ、さうだ、女だ、早くつれて行かう、今夜は神様のお祭ぢやないか、人身供養をするに丁度よい。」

「さうだ、この女なら、美しくつて、若いからよからう。」

ど、一同はよろこんで、

「ワッサ〜。」

ど、雪子をついで行つた。

暫くして、太郎は氣がついて起きて、

「雪さん、雪さん。」

ど、よんでも返事がないので、

「よく寝てゐるな、恐ろしいの妻いのだ云つたつて、女はやつば

り、寝るとよく寝入つてしまふよ、俺のこんな目にあつた事なんぞはしらないだらう。」

と、云ひ乍ら、バスケットを探して、懐中電燈を、バツとつけて四邊を見まはした。

「おや、雪さんは居ないぞ。」

と、驚いて。

「雪さん、雪さん。」

と、叫んだが更に返事がない。

「さア大變な事になつた、さては先刻の怪物がつれて行つたんだな、何處へ行つたんだらう。」

と、太郎は血眼になつて騒ぎ出した。

「第一、血吹雪水晶の有所のかいた地圖を失つては一大事だ。」

と、探しに行く仕度をしはじめた。

するとこの時、眞暗な中から、血吹雪の光りが、サツと、さしたので、

「あッ。」

と、太郎は驚いて、尻餅をついた。

暗夜の秘密

—雪子は火あぶりに—

—暗から大きな手が—

太郎が吃驚して見てゐると、尙もギラツ／＼／＼、ピカツ／＼ピカツと光るので、

『變なものだな、ありや、何んだらう。』

と、太郎は雪子の事はしばし忘れて、見て居つたが、フト思ひ出したのは、伯父の言葉！

『あツ、あれは血吹雪水晶の光りだ、さうだ、血の色した光線を

發すると云ふ事だが、あれだ、あれにちがひない。』
と、太郎はすつくと立ち上つて、その光りを頼りに、一散に走つた。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

『さアもう大丈夫だ。』

と、云つたのは健一である。

『太郎の奴は投げ殺し、雪子の奴は魔睡劑をかけたやつて、漸くの事で取つて來ましたよ。』

と、出して見せたのは、卓也の寫眞の裏に書いてあつた地圖。

太郎と雪子はそれをはいで持つて来たのであつた。

「さア、もうこれから、すぐに探しに行かう。」

と、二人は探海燈を持つて、地圖にある三角山の穴へ来た。

「こゝだ、こゝだ。」

と、二人は穴を這入つて、卓也の埋めたところへ来て、一生懸命に掘つたけれど、遂に血吹雪水晶は出て来なかつた。

二人は汗みごろになつて、ガツカリして、

「なんだ、ばか／＼しい。」

と、やけくそに健一は云つた。

「けれど、こりやことによると、他に知つてゐる奴があつて、先

廻りして、もう取つて行つたのかもしれないよ。」

と、安二は注意深く云つて、四邊を見廻したが、

「あゝ、こりや誰かもう、持つて行つたわい。」

「何うしてだ。」

「だつて、地圖の添へ書きには、上に大きな石が上つてゐると云ふのに、石がない處を見ると、取つて行つたにちがひがありませんよ。」

「さうだ。」

と、健一はがっかりして、

「兎に角、外へ出やう。」

ど、二人が穴の外へ出ると、ギラツ／＼と光つたものが眞暗な彼方からした。

「あッ、ありやなんだらう。」

ど、健一の云ふのを、ジツと見てゐた安二は、

「は、ア、ありや血吹雪水晶にちがひがない、まア行つて見ませう。」

ど、二人も水晶の光りを頼りに進んだ。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

太郎は漸く、その傍へ来て見ると、大きな木の上に、ギラ／＼

ど水晶が光つてゐて、その木の下で、多数の土人が、雪子を棒の先に縛して、四邊からドン／＼火を焚いてゐた。

「あッ、こりや大變だ。こりや、雪子さんの身の一大事だ。」
ど、慌てゝピストルを出した。

土人等はそんな事は少しも知らないから、

「神様、神様、今年も無事に經される様に願ひます。」

「お禮にこの女を供養にします。」

どか云ふかと思ふと、

「スツテンテラ／＼ポーター／＼。」

ど、土人の唄をうたつて、ヘツピリ腰をおつ立つて、タンゴ踊り

見たいな事をやり出した。

雪子は気がついて見ると、自分は木に縛られて、火あぶりになつてゐるから、

「あれ……」

と、悲鳴を上げて、

「助けて下さい、助けて下さいよう……」

「回を云ふんだい、お前は神様へ上げた人間なんだ。」

「かみさまつて、何んの神様なんです。」

と、雪子は恐しい乍らも聞いた。

「それ、お前の頭の上に光つてゐる、血吹雪の神様だ。」

「えッ血吹雪……もしや血吹雪水晶ぢやありませんか。」

「水晶ぢやない、神様だ、神様は人間の血を吸ひなされるんだ、だから、お前を火にあぶつて、暖くして神様に差し上げるのだ。」

「えッ。」

と、息も絶えるばかりに驚いた雪子は、一生懸命になつて、

「太郎さん、助けて下さいよう。」

と、身悶えして、叫んだ。

「今、助けてやるから、安心なさい。」

と、云ひたくも、さどられてはならじと思つた太郎は息を殺して今、雪子に火をつけやうとした土人を、的にして、ピストルの引

金を引いた。

轟然一發！

天地をとろろかす音響と共に、

「あッ。」

ど、土人は胸をうたれて、バツタリ仆れた。

「さア大變だ、神様がお怒りになつた。」

「ワイイ。」

ど、土人は蜘蛛の子を散す様に、四方へ逃げてしまつた。

この時、太郎は走り出て、

「雪さん。」

「おッ太郎さん。」

「今助けて上げます。」

ど、急いで、雪子を下して、早速、木の上の血吹雪水晶を取つて懐中に入れた。

「さア、雪さん、早く逃げやう。」

ど、二人は手に手を取つて、一散に走つた。

この時、土人の一人がこの有様を見て、

「それ曲者が神様を持つて逃げ出したぞ。」

ど、後を追つて來たから、ズドンと一發ピストルを打つたので、
「ワッ。」

と、云つて仆れた。

太郎と雪子は後をも見ずに、一散に海岸さして逃げた、その様子を遠くから見てゐた西澤親子、

「おや、太郎も雪子も何うして生きてゐたらう。」
と、安二は吃驚した。

「それより、早く後を追はねばならぬ。」
と、二人も太郎と雪子の後を追つた。

* * * * *
その翌夜太郎と雪子とは漁船に乗つてゐた。

「雪さん、昨夜は驚いたらう。」

「え、もう私、死んでしまふかと思ひましたわ。」

「僕も何うしたんだらうと思つたさ。」

「何うして、太郎さんは私を連れて行かれたのを知らん顔してゐたの。」

「知らん顔とは非道いね。」

「だつてさうだわ、あんなに切ない目に會つてるのに来てくれなかつたんだもの。」

「それより雪さんはまだ非道いと思つたよ。」

「何うして。」

「何うしてつて、昨夜の僕の方の事を知らなかつたの。」

「少しも知りませんでしたわ。」

「だから、非道いと云ふのさ。」

「あら、そんな事を仰有るけれども、私、私、はじめて氣のついた時は、木に縛されてゐたぢやありませんか。」

「よく寝てゐたんだね。」

「寝てゐたんだか、何うだか解らないわ。」

「それが可笑しいね。」

「何うして。」

「でも大勢につれられて行くのに氣がつかんとは、實によく寝て

ゐたものさ。」

「あゝ、寝てゐたんぢやないのよ。」

「なんだか話しが變だなア。」

「あら、まだ疑つてゐるの。」

「疑ると云ふわけぢやないけれど。」

「私、少し何うかすれば、すぐ眼をさますのに、昨夜だけはどうも變よ。」

「さうだね。」

と、太郎は暫く考へてゐたが、

「あッ解つた。」

「何が解つたの。」

「そりや昨夜魔睡劑をかけられたのさ。」

「誰に？」

と、雪子の方が却つて、不審に思つた。

「實はね、昨夜、僕は曲者と戦つたのさ。」

「あら、曲者つて。」

「僕の足を踏んだので、はつと眼をさました處が、僕の鼻の處へ何かつけやうとしたのさ。」

「それから何うして。」

「僕は曲者と、組ついたが、投げられてしまつたのさ、それで僕

は一時、氣絶したが、何か僕の鼻につけやうとした時、何んとも云へぬ匂ひがしたが、あれが魔睡劑なんだよ。」

「まア……私はそれでやられたんですわね。」

「それで雪さんはつれて行かれたのさ。」

「でも私、太郎さんに助けて頂いて、命びろひをしましたわ。」

「僕もあの時、何うなる事かと思つたね。」

「さうでせう、私はもう生きた心地はしませんでしたわ。」

「それはさうと、無事に血吹雪水晶は手に這入つたから、安心

『〇』

「私に見せて下さいな。」

「見給へ、僕もまだ見ないのだから、一緒に見やう。」

と、懐中から出して、見やうとした時、薄暗い太郎のうしろからヌーと大きな手が出て、すばやくその血吹雪水晶を掴んで、その手は消えてしまつた。

「あッ。」

と、驚いて立ち上つた時、何者か太郎の口を押えたかと思ふと同時に、雪子も口を押えられた。そして、雪子の身體は何處へもなく消えてしまつた。

しばらくすると、真暗な海中に當つて、

「ドブーン。」

ど、何か投げ込む音がした。

大都會の騒動

——觸れば命がない——

——血を吹いて来る——

近頃、東京全市が、夜の帳に閉されて、人が寐に就く時分になると、市の一隅に當つて、何者とも知れぬ、怪し氣なる血吹雪色の燦光が、ギラ／＼と真黒な、空の四隅に輝くのであつた。

「何んだらう。あれは。」

と、人々は奇異の眼を、瞠つて、寄るとさはると、この噂で、持

ち切つてゐる。

『どうも、不思議だね。』

『あいつがギラ／＼と、來ると、私は何んだか、悪い事の前兆のやうな、氣がして、飯もろく／＼咽喉へ通らない。』

『事に依つたら、外國から入つて來た間諜でもが、夜になるとあゝいふ事をして、市民の動勢を探るのぢやないかしら。』

『さあ、さうでもないだらうが、兎に角、不思議な事があるものさ。』

『一體、あれについて、警視廳は何をしてゐるんだらう。眠つてもゐるのかしら。まるで、調査もしないんだからね。』

『イヤ、然うではないで。人の噂に聞いて見ると、内々で偵察はしてゐるんだ。』

こんな噂は、彼方でも此方でも絶へず、起つてゐる。

この事に付いては、當の警視廳でも、極力、その如何なる理由の爲に、夜なく怪しき光が、市民を恐怖をさせるのか、取調べてはゐる。

時の警視總監竹村氏は、

『一體、あの光は、何んとなく、或事柄の相圖のやうに、見受けられる。その證據は、時を措いては光つたり、消えたりしてゐるのではないか。』

『それには、私も大いに賛成です。』

と、云つて、立上つたのは、新進の探偵中田であつた。

『僕は、その事に就いては、大いに取調べて見たいと、思つてゐます。』

『ホウ。君が取調べて呉れる。それは有難い。では早速、一つ遣つて貰ひ度いが、どうぢやらう。』

『え、取調べて見ませう。』

と、中田は、これから直ぐに、現場に行つて、取調べべく立上つた。

『ア、一寸待ち玉へ、併し、其處には如何なる事がしてあるか分

らん。』

『ハッ大丈夫です。』

『充分、注意の上に注意して一つかゝつて貰ひ度い。』

『委細、承知しました。』

中田探偵は命を受けて、早速に出かける事になつた。

彼は日比谷から電車に乗ると、三田の方に向つた。

何故なれば、彼は品川邊がたしかに、其方角だらうと、心に思つたから。

札の辻で乗つて、品川に向ふ電車の途中、偶然にも以前、一度ある事件の爲に、警視廳に連れてこられた、女賊のお傳と云ふの

に會つた。

「お、お前は、お傳ではないか。」

と、中田探偵は驚いたやうに訊いた。

「まあ、中田さん。」

相手のお傳も奇異の眼を睜つた。

「一體、お前は其後、何うしてゐるんだ。」

「何うしてゐるつて、まア、訊いて下さい。」

「ウム。」

「それに就いて、大變な事があるんですよ。」

「ウム。」

「實はね。」

「何んだ。」

「品川に私は、今、ゐるんですが、實は血吹雪水晶の事についてね。」

「何、血吹雪水晶。」

「え、知つてゐらつしやるでしょう。」

「血吹雪水晶つて何んだ。」

「アノホラ、夜、ギラ／＼と光るアレですよ。」

「ア、あれか。あれが、何うしたんだ。」

「まア、實はこゝういふ譯です。」

と、話しかけやうとする時、早くも、電車は品川に留つた。

「品川々々。」

と、云ふ車掌の聲に、

「品川、さあ、降りて、歩き乍ら聞こう。」

お傳と中田探偵は、品川の通から、歩き乍ら、血吹雪水晶の事に就いて、色々話合ひ乍ら歩いた。

* * * * *

品川の一角に立つた、怪し氣なる塔。

その塔の頂上には、彼の西澤親子の所持する處の血吹雪水晶

の本體が、仕舞つてあるのだつた。

此頃、その塔で、使用されてゐる男の中に、怪しい老番人があ

これぞ、即ち中田探偵の變装せるものであつた。

さりとは露知らぬ、他の番人連中は、今夢中になつて、破れた一室に火鉢に當りつゝ、何か喋つてゐるのであつた。

「兎に角、あの血吹雪水晶が、萬一、失くなるやうな事があつたら、それこそ、大變だよ。」

「そうだ。」

「到底もく、あの主人と來た日には、恐ろしくあいつを大切に尊

重してゐるんだからな。」

「そりや尊ぶのは當然だよ。なかく苦心して、何んでも、印度の方から、買つて來たと云ふ話だ。」

「ホ・ウ。」

「だから、萬一にも、紛失するやうな事があつて見ろ。それこそ我々の命は亡くなつて了ふアね。」

「大きにそうだ。」

「まア、お互ひに用心するに、越した事はないけれど。」
こんな話を、チラと耳にした中田探偵は、

「しめた。」

と、ばかり心の底に囁いた。

「そして、あの血吹雪水晶は、非常に珍妙不思議な水晶で、その人間の用ちる様によつては、どうにでも、なると云ふんだからネ。」

「しるやうつて、何うするんだ。」

「未だ知らないのか。」

「俺達が、知つてゐるかい。」

「そうか。ぢや、教へてやらう。」

「頼む。」

「ありアね。お化だヨ。」

「お化。」

「まア、早く云へばお化だ。」

「へえ。」

「ごんな風なんだい。」

「用法かい。」

「ア。」

「その用方に依ると、色々變るんだ。」

「何が。」

「何がって……」

「何を云つてゐるんだ。」

「お前こそ、何云つてゐるんだ。」

「だから、さつきから、訊いてゐるぢやないか。」

「だから、此方も教へやうと思つてゐたんだ。まア聞け。」

「さあ聞いてゐる。」

「ありアね、血吹雪と云つてね、非常に恐ろしい力を持つてゐるんだ。」

「ウム。」

「用ひ方に依つては、だしぬけに、血を吹いたりするんだ。」

「へえ。」

「だから、滅多に、あれを掴んだら、それこそ激い目に會ふよ。」

「併し、あれが一つあれば、非常な金持になると、云ふぢやないか。」

「そりや、金持になるさ。」

「何うかして、血吹雪水晶を持ち出す用法はないかなア。」

「馬鹿云へ。飛んでもない。」

「考へても見ろ、彼奴一つが、金持の根元だぜ。」

「それや、然うだが……」

「だからヨ、持出すとしたら、夜中だナ。誰もこつそり知らぬ内に持ち出すんだな。」

「それより、外にあるまい。」

「そうだ。」

「だが、首尾よく持ち出すにしても、何うして、あれを、金に變へたものか、それだて。」

「そんな事は、造作もないぢやないか。」

「造作もないつて事があるか。」

「造作ないヨ。」

「何か、甘い用法があるか。」

「無い事もないさ。」

「有つたら、教へろ。」

「財産二分するか？」

「するとも。」

「ぢや、俺の考へを云つて見やう。」

「云つて見ろ。」

「斯うしたら何うだ。」

「何うだ？」

「夜中に、上へあがつて、あのしまつてあの奴を、打ち壊すんだな。」

「何んで、」

「何んでつて、そりや色んな方法があるさ。」

「その方法は？」

「打壊して了へば、最う此方のものだ。」

「そりやさうよ。」

「持ち出したら、血を吹くかい？」

「吹くとも。」

「其奴は困るな。」

「困つたつて、さういふものなのだから仕方かないよ。」

「まア、そんな事を、ビク／＼するにも當るまい。」

「そりや、まあ然うだがね。」

「持ち出すのは、俺が引受けた。」

「お前が、引出すか？」

「そいつア、大丈夫だ。」

「ぢや、お前に任せる。」

「其變り、持ち出したら、お前に委託するぜ。」

「よし、引受けた。」

こんな話を、蔭で聞いてゐた中田探偵、ハタとばかり、膝を打つた。

その音に吃驚して二人が立上る時、中田は矢庭にピストルを出して突付けた。

三度目の決心

——蛇責め水責めの苦しき——

——三度目の變装をして——

「あッ。」

ど、云つて、西澤親子は兩手を上げてしまつた。

「さア、もう運はつきたのだ、神妙に縛につけッ。」

ど、中田探偵はシリくどつめよつた。

蒼白の顔をした安二は、シリくど後去りをしたが、何か中田探偵に隙があつたと見えて、

「汝れ。」

と、ばかりに、傍の火鉢を取つて投げた。

「あッ。」

と、云ふ間もあらばこそ、四邊は一面の灰……。

「それ、安二ッ。」

と、健一が何か云ふと、フト氣がついた様に、彼は傍のボタンを押した。

「あッ。」

と、云ふ中田探偵の聲がしたかと思ふと、その儘、灰の朧々と立ちのぼる中に、探偵の姿は見えなくなつたのであつた。

「いや、實に驚いたよ。」

と、健一は吻つとした顔して、安二を振り返つた。

「實際、私も何うなる事かと思ひましたからね。」

「もう探偵が這入つてゐるんですからね。」

「さうだ、こりや、うつかりした事が出来ないよ。」

「まつたくですよ。」

と、親子は血走しつた眼に安心の色を浮べた。

「何うしたらいゝだらうな。」

「何をです。」

「今の探偵をさ。」

「思ふ存分、責めてやるんですな。」

「さうだ、まだ。この邸が出来てから、いろいろの機械を使用しないが、一度つかつてやらうぢやないか。」

「それはいゝ思ひつきですね。」

と、二人は奥の室へ来て、

「最初は何がいでせうな。」

「さうだ、アピセ水がいたよ。」

「いゝですとも。」

と、安二は傍のボタンを押した。

*

*

*

*

*

「あッ。」

と、云つてその儘、姿をかくした中田探偵は、電気仕掛の落とし穴へ落ちたのであつた。

「ウーン。」

と、漸く息を吹き返して、四邊を見ると、眞暗だ。

「あッまたやられたな。」

と、中田探偵はさほど驚いた様子でもなかつたらしい。

「なアにくそ、こんごころはまた逃げて見せるぞ。」

と、力んで、手探りをやつて見たが、こんごはなかく、嚴重な造りだつた。

『おやく。』

と、少々へコタレ氣味だつた。

少しは手ごたへがありさうなものだが、と、思ひ乍ら、觸つて見たのは、何んだか知らぬが、管の様なものだ。

『あツさうだ。』

と、氣がついて出したのは懐中電氣。

バツと照して様子を見ると、驚いた。

『あツ。』

と、叫ばずには居られない、壁に蛇がウヂくしてゐる。

『こりや大變だ。』

と、四邊を見ると、何うしても逃げ道はない。』

そのうちに、ドツと落ちて来た水。

『あツまた水責めか。』

とは思つたが、この前の様に壁にもたれて、落水をよける事が出来ない。

傍へよれば蛇がある、真中に居れば水に逢ふ。

『さア、こんどは困つたぞ。』

と、流石の中田探偵も困つたらしい。

すると暫くして、水はやんだ。

『おややめたぞ。』

ど、中田探偵は、吻つと安心した。

「こりや、有難い、このうちに誰か助けに来てくれんかなア。」

ど、思つてゐる處へ、ブーンと匂ふは厭な煙り。

「おや、變なものだぞ、何んだらう。」

ど、思ふうちに、傍の鐵管から、モク／＼と煙りが出て来る。

「あッ瓦斯責めにするのか、これは堪らぬ。」

ど、ハンカチで、鼻口を覆ふたが、強烈な毒瓦斯には、眼も廻り

氣も遠くなりさうになつた。

「あゝ、俺はいよく命を取られるのかな。」

ど、中田探偵は、もう死を覺悟してしまつた。

すると、それも暫くにしてやんだので、

「あッこりや俺の命は助かるかもしれんぞ。」

ど、喜んだも束の間――

ピリツと足がしびれた。

「おやッ。」

ど、思はず飛び上つた。

ついで、ピリツ／＼と足がしびれて来る。

「あッ電氣をかけやがるんだな。」

ど、中田探偵はビョン／＼と飛び上り乍ら、

「あゝ、苦しい／＼、こんな責め方をしやがるか。」

ど、口惜しさうにしてゐると、それもまたやんでしまった。

「あゝ、有難い、やつぱり神は俺を守護したまふのか。」

ど、両手を合せて申妻もなく、いつとはなしにダンくと、四方の壁が身に迫つて来る。

「あれッ、あれ〜〜。」

ど、驚くよりも、呆れてしまつて、

「こりや堪らん、俺は押しつぶされてしまふのかしらん。」

ど、思つてゐるうちに、ザア〜〜と、瀧を流すやうな落水。

「あッ。」

ど、叫んだ中田探偵は、息をつく間もないので、もう駄目だと、

死を覺悟してゐた。

けれども残念だ、何うかして、この悪漢を捕えなければ、世間の人に對する顔が立たん、死ぬにしても、たの悪漢を逮捕して死にたいと、中田探偵は心のうちで、出来るなら、何うかして、今一度逃れたいと云ふ一悶があつた。

「さアヤブレカブレだ、ぞつち道、死ぬんのなら、やれるだけやつて見ろ。」

ど、彼はだん〜増す水に身體を浮かせて行くうちにフト手に觸れたものがあつた。

それは丸管だつた。

『これに絶つてゐやう。』

と、絶りつく拍子に、スポンとそれが抜けて、サツと流れ出る水と一緒に中田探偵の身体は外へ出てしまつた。

『あゝ、もう大丈夫だ。』

と、四邊を見れば、夜の海だ。』

臺場を離れて、品川海岸まで必死になつて泳いで來たが、海岸へつくと、

『やれ、嬉しや。』

と、思ふ心で、氣が抜けて、バツタリ仆れて、その後は何も解らなかつた。

暫くして、誰か耳もとで、しきりに自分の名を呼んでゐる様だな、と思つて、バツチリ眼を開けて見ると驚いた。

四邊には探偵長、はじめ、多くの探偵が集まつて、しんばいさうな顔で、中田探偵の顔を見ながら、各自に、

『中田君、しつかりしろ。』

『おーい、中田君。』

と、必死で呼んでゐたのだ。

中田探偵が眼を開くと、探偵は雀躍りして喜び、

『おゝ、中田君、氣がついたか。』

『おゝ、皆さん、これは何ともお禮の申し様がありません。』

と、起き様とした。

「いや、無理しちや不可ん、その儘、その儘。」

「いやもう、大丈夫です。」

と、飛び起きた。

中田探偵が、品川海岸で氣絶してゐると、通りかゝりの巡査が見て、

「あッこれは有名な中田探偵だ。」

と、電氣をかけるやら、介抱するやらしてゐる處へ、探偵長が自動車でやつて来て、

「兎に角、つれて歸らう。」

と、自動車にのせて歸つたのであつた。

「探偵長、何うか今一度私にあの血吹雪水晶のある悪支配人等の處へしのび込ませて下さい。」

と、決心の色を見せた。

「けれども、こんどはやすんで他の者にやつてもらつては何うだね。」

「いゝえ、その職にたほれりや本分です、第一、二度とも失敗して助かる處から見れば、二度生れかはつたも同じです、もう命はないのですから、この復讐をさせて下さい。」

「よろしい、君がそれ程決心のあるのなら、やつて見たまへ。」

「その代りお願いがあります。」

「何んだね。」

「何うか、青色の探海燈を三角に三度振つたら、乗り込んで下さい。」

「萬事は承知した。」

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

「やいく、何をしゃがるんでえ。」

「何を。」

ど、品川海岸で、乞食風の男が一人の男を殴つてゐた、そこへ通

り合せたのが長公だ。

「やい、手前たちはなんて非道い事をしゃがるんでえ、さア俺が相手になる。」

ど、云ふとバラくと逃げてしまつた。

その男はべこく頭を下げて手真似をする。

「は、ア啞だな。」

ど、何を考へたか、

「おッお前は可愛さうだ、俺の處へ來ねえ、使つてやるやら。」

ど、長公は親分氣ざりで、その乞食を臺場の魔城と云はれる處へ連れ歸つた。

これが三度目の變装した中田探偵である。

『こりやしめたわい。』

と、腹には思へど、啞の市助になりすましてゐた。

あの事あつて以來、西澤親子は一ヶ月に一度、それも夜來るだけであつた。

サテ、これからが大活劇が突發するのである。

怪光のひらめき

—油ぎつた身體へ火—

—ニヤリと凄じい笑ひ—

突然、東都の都會の、しかも南端の空に、夜な夜な、血吹雪色した怪光が閃めくので、市中は一大騒動を起すは無理もない事である、著者自身、

『あッ。』

と、云はざるを得ないのである。

さて、この怪光の閃めく處は何處か？

品川を離れたお臺場の大きな屋敷に、かつて探偵長はじめ、青年中田探偵や、安井老探偵を驚かし、行衛不明となつた、悪漢長公と毒婦お傳が、浮世を茶にして暮して居つたのである。

「お前さん。」

「何んだ。」

「毎日、恁うして暮すのはたいくつだね。」

「我儘を云ふなよ。」

「我儘だつて？」

「さうだよ、我儘ぢやねえか。」

「何うして。」

「大將のお蔭で、恁うやつて、甘い酒は腹一杯のめるし、甘いものも鱧腹喰つてよ、毎日ゴロ／＼寝てさへ居りやい／＼んぢやねえか。」

「そりや、さうだね、けれど、人間も恁う油つくくなつちや身體

が持ち切れないね。」

「それが我儘と云ふんだよ、誰がアクセクして、この世の中を渡るもんか、寝てゐて金を儲けるのが當世の利口者だ。」

「すると何かね、私達は利口者の方なのかい。」

「云ふには及ばない事だよ。」

「併し、あんまり有難くない事さ。」

「おう／＼、そんな事が大將に聞えたら何うするつもりだい。」

「何うするつもりつて、まつたくの事ぢやないの、お前さんもしつかりおしよ。」

「何をしつかりするんだ。」

「いつまで、さうして人の厄介になつてゐる氣なんだね。」

「決して厄介になんぞなつてはゐないぞ。」

「なつてると云ふものさ。」

「誰に。」

「西澤の大將にさ。」

「馬鹿云へ、これでも俺們はやつぱり、云はれるまゝに働いてゐるんぢやないか、すりや、その報酬として、憚うして置いてくれると云ふものだ、何を以つてか、厄介者たるや。」

と、長公、一流の學者のつもりな事を云ふ。

「おふざけでないよ、西澤の奴等にうまい汁を吸はれてよ、さう

してゐられるものかい。」

「それも、一理ある。」

「一理も二理もある事だけれど、お前さんはもとの様に本氣に何うして働いておくれでないの。」

「さアそこだて、近頃、この家から、血色の光りが出ると云ふので、なかく大變な騒ぎだせ。」

「町中が、ね。」

「さうともよ、まア一度行つて御覽、大變なんだから。」

「その町へ行つて見たいけれど、やつてくれないぢやないか。」
と、お傳は不平面をする。

「お前が、チヨロまかをやつて、また尻尾を出すと不可ねえからよ。」

「いつそんな事をしたえ。」

「もう忘れたのか。」

「忘れるにも、何んにも、そんな覚えは更にないだからね。」

「笑はせやがらア、先月、淺草で、女の懷中をカギしてよ、今少しでやられる處を、俺が運よく通り合せて、探偵の眞似して、お前を拘引すると、うまく云つて、やすくど助けたぢやねえか。」

「さうだつたね。」

「さうだつたねもないものだ、だから、外へはうつかり出せない

んだよ。」

「困つたねえ。」

「グチを云ふ處か、有難く思ひねえ、お前えが可愛いと思へばこそ、お前の身を案じて云ふんぢやねえか。」

「だから、お前さんに限ると云ふんだよ。」

「ふざけるない。」

ど、その時は物笑ひになつてしまつた。

毎日こんな事を云ひ合つては、二人はつまらない日を送つてゐるのであつた。

その夜の事であつた。